

第72回全米公共・行政学会（ASPA）全国大会2011参加報告

牧野 松代 兵庫県立大学経済学部教授（兵庫自治学会運営委員）

3月11日～15日の5日間、メリーランド州ボルティモア市で開催された第72回全米公共・行政学会（ASPA）全国大会2011に参加しました。大会初日の3月11日午前中（現地時間）の最初の分科会が終了した時に、参加者から日本での震災発生ニュースを知らされ、まもなく、マグニチュード9を越す大地震、巨大津波、原発事故と続く災害の全貌が明らかになりました。全体会ではメレディス・ニューマンASPA会長が開催挨拶の冒頭で、東日本大震災への哀悼の念を表明され、被災国日本からの参加者が名前を挙げて紹介されました。大会のプログラムの合間に会場のホテルの自室に戻ってCNNとNHK Worldの24時間災害特集を観るといった毎日でしたが、各国の多くの参加者から心こもったお見舞いの言葉を頂きながら、何とか全会会を無事に過ごしました。

1. 2011大会のプログラム

第71回目に当たる今年の大会は「国境を超えた公共政策・経営」（Public Administration without Borders）をテーマとして掲げ、全体会と分科会、ワークショップ、サブテーマごとのディスカッション・サークルなどが開催されました。

（1）全体会

例年通り、全体会では基調講演（今年度はメリーランド州財務局長のナンシー・コップ氏）、公共分野で優れた業績をあげた公務員や教育研究者に授与されるストーン賞の記念講演（Donald C. Stone Lecture）、公務に対する高潔さや優れた公共サービスの実現に対して贈られるリチャードソン賞の記念講演（Elliot Richardson Lecture）、社会的公正の実現において優れた業績を示した公務員や地域活動家に対するホブソン賞の記念講演（Gloria Hobson Nordin Social Equity Award Luncheon）が行われました。

今年度のリチャードソン賞の受賞者は、ハリケーン・カトリーナと2010年メキシコ湾原油流出事故において沿岸警備隊司令官をつとめ（2010年10月に退役）、「非常時のリーダーシップの発揮」として高い評価を受けているタッド・アレン氏（Admiral Thad Allen）で、ちょうど日本の大震災の直後であっただけに、彼の講演は強く印象に残りました。



<タッド・アレン氏>

彼が講演で強調したのは、「命令系統の統一性」（unity of command）が確保されている軍の作戦と違って、かつて例のないこのような災害時に求められるのは、「政府全体の対応」（whole of government response）で、権限と責任がそれぞれ異なることをむしろ前提条件として、全ての組織と個人の能力と機能が1つの目的を達成するために協働する「努力の統一性」（unity of efforts）を創出することであり、これが今日の複雑化した、民主主義のもとでの公共マネジメントの課題であるということでした。さらに、過去の経験と教訓、適用すべき法令、ハリケーン対応などの危機管理モデルを参考としながらも、過去の経験を越える出来事に遭遇し、緊急の行動が求められる場合は「従来のモデルから離れた新たなメンタル・モデル」のもとで自ら判断し、直接に対応すべきこと、通常要求される任務や、時には法令によって認められた範囲を超えても、市民のために必要なことに取り組まねばならず、また、リーダーは自分自身のモラルに責任を持つことが必要であること、リーダーシップの定義は「機会と能力（opportunity and competency）を調和させること」などを語りました。

この講演に示された考え方は、震災後の現在の日本の状況にも参考になるとともに、米国では、大学での科学的な公共政策・マネジメント教育（公共倫理やリーダーシップを含む）が、実際の教育現場や著書などを通じて、連邦政府のトップレベルの行政官からジュニアの公務員に至るまでの実務家に尊重され、信頼されており、理論と実践のバランスの取れた教育訓練が重視されていることを改めて感じました。

（2）分科会など

分科会のテーマには倫理とガバナンス、災害マネジメントと国内安全保障、環境政策と公共部門の役割、保健医療政策とマネジメントの国際比較、グローバル財政危機のもとでの財務管理、公共部門の実績にかかわる課題などがあり、私は全体会の他に、コミュニティ指標と自治体の業績評価を結びつけることをめざす「コミュニティ指標コンソーシアム」（CIC）、公共ガバナンスの国際比較などの分科会に参加しました。ワークショップには経済危機の下での業績向上と説明責任、非営利団体のマネジメントと組織・運営システム、災害時の地域・教区コミュニティ組織の役割、韓国のナレッジ・マネジメントシステム構築（e-Peopleシステム）などがありました。また、例年通り、会期中には公共行政分野の大学院プログラムを有する大学の広報ブースや関係書籍の出版社のブースを集めた展示場と Public Job Fair の会場が併設されました。

2. 2011 大会の特色

(1) ASPA のグローバル化を反映した大会

今大会の特色はテーマに見られるように、近年著しい ASPA のグローバル化を象徴する大会となったことです。今回のストーン賞の記念講演は、OECD など長年公共マネジメントの国際比較研究に従事して来たゲアルト・ブッカアルト氏（ベルギー、リューベン大学教授）によって行われました。米国人以外が本賞を受賞したのは異例のことらしく、本大会のテーマを象徴する出来事として注目されました。他にヨーロッパからは、伝統的な「行政学会」の国際組織である国際行政学会（International Institute of Administrative Sciences: IIAS）やその傘下組織で ASPA との学術交流協定（MOU）を締結している EGPA（European Group for Public Administration）から代表的な研究者・実務家が参加していました。また、昨年 10 月に成立した ASPA 国際支部（International Chapter）（※詳細は最終頁）の初会合が、国際コンソーシアム（ASPA と学術交流協定を結ぶ国際組織・各国団体の代表者の会合）および Global Network プログラム（大学院の公共行政プログラムに在籍するアジア系留学生・教員の団体）と合同で開催され、私も兵庫自治学会および ASPA 国際支部の役員として参加しました。

(2) 多様性の重視と公共行政教育との連携

本大会では、ASPA の近年の活動の重点である「多様化（Diversity）の重視」が、「社会的公正（social equity）の実現」の目標と合わせて、一層進んだ印象を受けました。大会名誉議長は、公共行政部門におけるアフロ・アメリカンのリーダーで、1964 年以前に黒人コミュニティのために設立された大学（Historically Black Colleges and Universities）のひとつであるクラーク・アトランタ大学の学長を務めたウォルター・ブロードナック氏（シラキュース大学教授）と、ASPA の女性公共行政部門賞を 2 度にわたって受賞したカミラ・スティバース氏が務めました。カミラ・スティバース氏（クリーブランド州立大学名誉教授）は 20 年余にわたって、ワシントン州でコミュニティ NPO の運営に携わる傍ら、エバークリーン大学の MPA プログラムで教鞭をとっていた方です。

また、ここ数年、大学での MPA/DPA（Master/Doctor of Public Administration）プログラムが拡大・充実するに伴い、行政職や NPO/NGO マネジャーの社会人学生と留学生の ASPA 大会への参加が増え、教員・研究者候補でもある社会人大学院生は practitioner（実務家・専門家）と研究者（academics）とを合わせた“pracademics”の造語で呼ばれています。このような大学院生を中心に、学生の Public Debate セッションが初めて開催されました。教育の入口としての新入会員の入門フォーラムや出口の就職支援の Public Job Fair も昨年度大会から開催されていますが、今年の Public Service Job Fair は連邦政府、メリーランド州政府機関、大学、非営利組織などを合わせて 30 以上の公共部門の雇用者がブースを設け、求職者は無料で直接これらの機関への就職相談ができるだけでなく、専門家による履歴書・志願書の書き方のアドバイスなども得られるようになっていました。ASPA の国内各支部でも数年前頃から Public Service Job Fair の年次開催が始まっているようです。以前にエバークリーン支部の Job Fair（2007 年）をたまたま見学する機会を得ましたが、県庁でいえば課長クラス以上の現職公務員（連邦政府・州・自治体）の講演やパネル・ディスカッションもあり、「公務員」という職への自覚やインセンティブを高める教育の場ともなっていることが印象的でした。

3. エバークリーン支部との国際シンポジウムおよび現地視察

ASPA 大会直前の 3 月 8 日に、シアトル市のワシントン大学公共大学院（Evans School of Public Affairs）で ASPA エバークリーン支部主催（兵庫自治学会共催）の国際シンポジウム「持続可能なコミュニティと地域の再生・発展」が開催され、3 名の会員（牧野松代 [県立大学]、細見正樹 [県しごと支援課]、青田良介 [県立大学社会貢献課]）が発表者として招聘を受け参加しました。発表論題は、「持続可能な農業と産業連携、都市・農村の交流」（牧野（西村いつき氏 [県農業改良課]）との共同研究）、「地方政府の雇用施策を通じた地域再生―過疎地域への人口回帰の促進とコミュニティビジネスの支援」（細見）、「災害対応やコミュニティ再生に取り組むコミュニティとボランティア」（青田）の 3 つです。

シンポジウム前の数日間は、有機農業などワシントン州の「地域が支える食と農」の関係機関の訪問と現地調査、地域 NPO や地域の雇用支援団体の視察、シアトル市防災センターの視察などを行いました。

他の方々は折り返し職場に戻らねばならなかったため、ASPA 国際支部の今年度役員でもある私だけが、引き続き ASPA 大会に参加することになりました。結果的に自治学会支援による全国大会への派遣者がいなくなってしまい残念でしたが、今回、このような形で会員の大学教員と公務員がエバークリーン支部との交流に参加できたことは大きな成果でした。

また、2006 年に兵庫県立大学が企画した「ワシントン州夏期講座：持続可能な地域発展の実践に学ぶ」に参加し、昨年の ASPA 大会にも参加した神戸商科大学（当時）卒業生が今年 9 月からワシントン大学公共大学院の MPA プログラムに入学し、NPO マネジメントを専攻することになりました。今後も、兵庫県立大学を初めとする大学との連携しつつ、教育・研究者と実務家の国境を超えた協働を通じて、兵庫自治学会と ASPA との交流が地域の「公共」に奉仕する人材の育成と能力向上に貢献することを願っています。



<3-11 国際シンポジウム参加者>